

なぜ（社会）心理学が山のように知見を産出する学問になったのか
または、社会心理学の方法論に関する現場のオフレコ話

唐澤かおり

東京大学大学院人文科学研究科

「社会心理学」というと、社会集団の意思や振る舞いなど、「集団のこころ」を対象としている学問であると思われることも多い。しかし、実際には、「集団心」のような概念を激しく否定し、社会的文脈内での個人の心の働きに焦点を当て、社会的な諸要因が個人の内的な情報処理過程に及ぼす影響を明らかにすることが、その研究の中心であった。このような「個人主義的方法論」への傾倒は、社会心理学が心理学の一分野として確立してきたことの必然的結果であると同時に、今日の社会心理学の隆盛に大きく寄与していると考えられる。個人主義的方法論は、統計的検定が可能なデータ収集に都合の良い「主義」であり、こころの数量化との相性が良いがゆえに、「一般人のナイーブな社会理解」とは区別されるべき、客観的な知見に基づいた科学的知識体系として、社会心理学が自らを位置づけることに役立ってきたのである。とはいえ、社会心理学が個人主義的方法論にコミットしていることに対して、「社会」心理学といいながら「社会」を扱っていない、測定が比較的容易な個人の認知過程への偏重がみられる、個人内過程を測定するとされる尺度の濫用が見られる、などの問題が指摘できよう。くわえて、個人主義的方法論は、個人の内部過程の操作的定義に基づいた厳密な測定を志向するため、社会心理学の研究フィールドそのものを制約し、研究に「窮屈さ」をもたらしているようにも思える。したがって、社会心理学者のコミュニティが、コアな研究では個人主義的方法論を守りながらも、それを緩めた（もしかすると、いい加減な、ぬるい）研究を許容していくことの是非や功罪を考える必要があるだろう。